Osaka University Knowledge Archive

Title	“one of them”としての日本
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/52433
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

“one of them” としての日本

伊　勢　芳　夫

1891年に，Lafcadio Hearnは松江の近くの御津浦という漁村を訪れた．そこには旅館が一軒もなく，ある漁師の家に泊めてもらうことになったのだが，「10分もしないうちに，何百人もの群衆がその家を取り囲んだ．大人たちは半裸であったし，男の子たちは素っ裸であった．外国人を見ようと，群衆は建物の周りをぎっしりと取り囲んで，戸口に群がり，窓によじ登ったので，家の中が暗くなった」とHearnは記している．[1] 外観上明らかに差異のある見知らぬ人間に対するこの漁村の人々のナイーブな好奇心に，現代の我々は苦笑するかもしれない．しかし，今日でも，日本に住みついてかなりの日数を経過したのに，日本人から奇異の目で見られるという不満を訴える者は少なくないのである．そのことは，日本人が異文化の中で教育を受けた外国人との日常的な接触の機会が多くなるとか，異文化間コミュニケーションに上達するとかだけでは簡単に解消できない問題であろう．

これまで新聞などの様々な場で，日本人ないし日本が入るカテゴリーとして「西側」，「先進国」，「アジア」等が使われてきて，我々は西側の一員だとか，アジアの一員としての自覚が必要だとか言われてきた．しかし，果たして，日本人の意識の中で，「我々」という言葉が最大限に使われたとして，その中に，日本人以外の人々が入る余地があったのだろうか．それは極めて疑問であろう．冷戦時代に，公式の場で我々は西側の一員であると宣言されたことはあるだろうが，一般の日本人の意識において，そのような自覚などなかったのではないか．あるいは，第二次世界大戦で連合国と戦争したのだが，その当時の日本人が，同じ枢軸国のドイツやイタリアを

「我々」の中に含めていたとは信じがたい．このように，日本人にとって，たとえ国際化ということが叫ばれていようと，「我々」の中に非日本人が含まれることは稀なのである．

その原因の一つは，言語や宗教から，日常的な慣習に至るまで，少なくとも表層的なレベルにおいて，日本と，日本以外で存在するものとは大変違っているからであろう．日本人ないし日本文化を "unique" とする主張に対して批判的な外国人は多いし，[2] また，構造主義的なアプローチから，所謂ラングのレベルにおいて，世界中の言語や文化に共通するパターンが認められている．それは間違いではないとしても，我々の意識を形作るのは，むしろパロールのレベルではないだろうか．食べ物に対する好みや感情表現は，日常の経験を通して形成されていくものであろう．そういう意味で，個々の日本人が認識や情緒を共有する程度は，日本人同志と非日本人との間では明らかな違いがあり，それが目に見えない溝と意識されるのである．従って，おのずから，複数の主体がなんらかの共有しうる領域をもっているという意識から生まれる「我々」と，その圏外に存在する人々をさす「彼ら」の境界もそれと符合することはなんら不思議ではない．

ただ，そのような「我々」と「彼ら」という構図を意識してしまうと，文化的差異から生じる溝が実際以上に深く広く感じられるようになる．ある種の同一性の意識を共有しあう「我々」とそうでない「彼ら」との構図は，それぞれのこまごまとした文化的差異を実際以上に拡大させ，あたかも本質的な違いのような錯覚を抱かせる．例えば，歴史的・文化的につながりの強かった朝鮮半島や中国ですら，この百年間に，脱亜入欧のスローガンのもとで，朝鮮半島や中国の人々を「彼ら」と意識したこと，および侵略者とその被害者という意識をもつに至ったことで，日本とそれらの国々との間の溝は修復しがたいくらい広がっている．従って日本人の場合，なんらかの共有しうる領域をもっていると意識する主体の集合は，最大限に引き伸ばしても，それは日本のもつ地理的な境界から出ないのである．

そのことは西洋から非西洋を見る時にも言えるだろうか．

Conrad の *Lord Jim* において，主人公の Jim が語り手 Marlow にとって "one of us" かどうかが問題になるが，その場合 "us" は船員仲間に言及し

ているだけではなく，しばしば白人全体に敷衍されているのである．また，Kipling の “Oh, East is East, and West is West” という有名なフレーズは，Kipling 個人というより，広く西洋人の心に刻印された構図なのである．つまり西洋に属する人々の，西洋に含まれる国々に対する見方と，非西洋の国々に対する見方とは違う．それは，広い意味で彼らが古代ローマ帝国の子孫であり，非西洋人との比較において，外見が類似し，言語・宗教・学問の根を共有しているためである．それに対して，非西洋は彼らにとって，別の世界なのである．従って，ナショナリズムが昂揚している時代はそれぞれの違いを意識しても，非西洋と向き合う時，彼らは “we” であり，非西洋の人々は “they” なのである．

日本はもちろん，あらゆる面で西洋にとって “one of them” であり，“Oriental Other”, 他者なのである．従って，日本と接し，あるいは日本を理解しようとする時，まず西洋に対するオリエントの中の一国として意識され，次にそのオリエントの枠内で日本の特殊性が論じられる．もっとも，そのオリエントは，Saidが“the Orient is an idea that has a history and a tradition of thought, imagery, and vocabulary that have given it reality and presence in and for the West.” と言うように，[3] 西洋を中心とした，二項対立的な図式で作り上げられた存在なのである．従って，非西洋は，オリエンタリストによって，西洋の知識の体系の中に組み込まれていく過程で，政治的な力によって創られていくわけである．しかし，MacKenzie も言うように，実際はそれほど単純なものではないであろう．[4] オリエンタリストの中にも，西洋中心主義やオリエントというカテゴリーに疑問を抱く者もいるのである．

例えば，Said よりもほぼ一世紀近く前に，大英帝国から日本にやってきた Chamberlain がいみじくも，

> Europe’s illusions about the Far East are truly crude. Who would dream of coupling New-Englanders and Patagonians, simply because arbitrary custom has affixed the single name of ‘America’ to the two widely separated regions which these two peoples inhabit? Yet persons not other-

> wise undiscerning continue to class, not only the Chinese, but even the Japanese, with Arabs and Persians, on the ground that all are equally 'Orientals,' 'Asiatics,' though they dwell thousands of miles apart in space, and tens of thousands of miles apart in culture. Such is the power over us of words which we have ourselves coined.[5]

と指摘している．このようなオリエンタリストと，例えば，太平洋戦争中，日本兵の顔を猿の顔そっくりに描いて揶揄したような，ダウイニズムの亡霊に取り付かれた西洋中心主義者と同列に置くことはできないであろう．彼らの研究においては，西洋中心主義を相対化することによって，オリエントというカテゴリーから排除された側面に光が当てられているのである．

もっとも，そのような試みも，西洋の言語の言説の中でオリエンタリストは研究する以上，言説自体が内包する西洋中心主義の反発を受けないわけにはいかない．例えば，先の Chamberlain が，"They [the Japanese] know also well enough—for every Eastern nation knows it—that our Christian and humanitarian professions are really nothing but bunkum." と言う時，[6] 何人かのいつもは友好的な批評家から批判されたことを彼は記している．Chamberlain のこのような西洋を相対化する言葉は，彼自身のことではなく，日本人の見方を言っているだけなのに，まさに西洋を相対化するというそのことで，英語の言説の中では異物と感じられるのである．つまり，西洋の言説そのものが他者を排除しようとする求心力をもっているのである．

従って，一部には西洋中心主義の言説を脱構築し，そこから排除されたものを垣間見ようとする試みはあるとしても，全体の流れは，日本を西洋の作り出したオリエントというカテゴリーのもとで，知識化し，その知識を集積し体系化することで，英語の言説の中で「日本」が構築されてきたのである．本論では，その過程を英語で書かれた幾つかの著名な日本研究および日本をテーマにした小説を取り上げて検証することにする．

日本は，明治以前にも宣教師の報告や旅行記によって，西洋にその姿が

伝えられていたのであるが，圧倒的な情報量と共に，所謂近代的な視点からの観察は，開国以降のこととなるであろう．日本は鎖国から，ペリー提督によって開国させられるが，アメリカの強硬な態度に対する一般的な西洋の見方は非常に好意的だった．ただイギリス人の J.R. Black が，1880 年に出版した *Young Japan* でそのことに触れている箇所は，非常にアンビヴァレントである．例えば彼は，開国前は「この国は全く文字どおり，子供のように話し，考え，行動するといわれたかもしれないが，今では，子供っぽい事とは縁を切った」と言っているが，他の箇所では，「ペリー提督とタウンゼンド・ハリス氏が平和裡に条約を締結したことは承認されるが，いずれの場合も，権利に対する力の勝利であった．ペリーは，おとなしい人々をおどかすのに十分な武力をもってやって来た．おとなしい人々は，いわば『あのいまいましいドルを欲しがる外国人によって，やむを得ず開国させられた』のだ，そしてその武力は彼らをおどかした．」と言っている．[7] また，Black は，随所で，開国後二十年で西洋の技術をあらかた吸収したことに対する新鮮な驚きを表明していて，日本を鎖国という歴史的要因によって遅れて「国際家族」に入った国とみなし，西洋にとっての他者，つまり “one of them” という意識は希薄である．

Things Japanese で，Chamberlain は日本の日常風景から宗教・政治まで取り扱っており，またその参考文献まで記しているところから，第五版の出版された 1905 年までに，西洋人による日本についての研究はかなり進んでいたことが分かる．その序文で，Chamberlain は，明治期の日本の急速な西欧化に触れて，「古い日本」と「新しい日本」，つまり牧歌的な古い日本と思想・企業・巨大な科学的業績において進歩した西洋に肩を並べようとする日本との対比に言及しているが，しかしすでに触れたように，彼の記述にはオリエントという枠組みは余り感じられない．

意識的にせよ無意識にせよ，西洋とオリエントという枠組みで「日本」を作り上げようとしたのは Lafcadio Hearn であった．ヨーロッパでは，産業革命以降の急速な近代化によって生まれた歪みが，人々に牧歌的な世界に対する憧れをもたらしたが，とりわけ Hearn は，科学文明・功利主義を嫌悪し，それに対立するものとしての「日本」を *Glimpses of Unfamiliar Japan*

で構築していく．しかし，Chamberlain が "he had found the Land of the Gods, and his 'Glimpses of the Unfamiliar Japan' glorified the Japan which he imagined he saw." と評したように，[8] Hearn の「日本」はオリエントの枠組みの中で美化されたものであり，急速に近代化していく日本はほとんど排除され，田園や神話や仏像のイメージで飾られた，牧歌的であり，神秘的な世界に仕立てられていく．

例えば，Hearn は，あたかも楽しいことがあったかのように微笑みながら夫の葬儀へ出ることの許しを乞い，戻ってから笑いながら骨壷を示す日本人の使用人に対する西洋人女性の戸惑いの例を挙げる．Hearn は，この微笑の意味するところは，"'This you might honorably think to be an unhappy event; pray do not suffer Your Superiority to feel concern about so inferior a matter, and pardon the necessity which causes us to outrage politeness by speaking about such an affair at all.'" であると解釈している．[9] しかし，この「日本人の微笑」とそれに対する西洋人の戸惑いは，むしろ異文化間コミュニケーションにおけるテクニカルな問題ではないだろうか．聞き手の察し，あるいは気遣いを要求する文化と，そうでない文化にそれぞれ属する人間の，意思伝達の失敗の例である．しかし Hearn にとっては，これは西洋人と東洋人の本質的な差異の構図として捕えようとする．そして，「日本人の微笑」は，仏像のそれへと還元され，そこに日本人の本質を見いだそうとするのだ．

> It is toward that infinite calm that the aspirations of the Orient have been turned; and the ideal of the Supreme Self-Conquest it has made its own. Even now, though agitated at its surface by those new influences which must sooner or later move it even to its uttermost depths, the Japanese mind retains, as compared with the thought of the West, a wonderful placidity.[10]

Ruth Benedict の *The Chrysanthemum and the Sword* は，太平洋戦争末期に書かれたものであり，アメリカのプロパガンダが色濃く反映していることは，本文の至る所で見られるのである．つまり，アメリカ合衆国は，

自由で民主主義的で個人主義の国家として捕え，日本はそれに相対するものであった．それが極めてイデオロギー的であることは，アメリカの黒人の公民権が認められたのが，この本の書かれた後であるという歴史的事実からも明白であろう．

Benedict が *The Chrysanthemum and the Sword* の最初で西洋人の視点から "The Japanese are, to the highest degree, both aggressive and unaggressive, both militaristic and aesthetic, both insolent and polite, rigid and adaptable, submissive and resentful of being pushed around, loyal and treacherous, brave and timid, conservative and hospitable to new ways." というような全く一貫性の見られない日本人の性格や行動を問題にし，[11] その矛盾に満ちた日本人の性格の中に，あるパターンを見いだそうと試みる．しかしその過程で，Patrick Brantlinger が *Rule of Darkness* において詳しく分析した，[12] 西洋による自らの弱点や欲望のイスラム社会への転化と同種の操作を，Benedict は行っている．例えば，

> Their [Japan's] War Services continued to get out series of war films which figured China's "love" for Japan under the image of desperate and disordered Chinese girls who found happiness by falling in love with a Japanese soldier or a Japanese engineer. It was a far cry from the Nazi version of conquest yet it was no more successful in the long run. They could not exact from other nations what they had exacted of themselves.[13]

しかし，この自国の理念を他の民族に押しつけることは，敵国日本だけではなく，アメリカもまた多くの小説や映画で繰り返し行ってきたことに他ならないのだ．

Benedict は，日本の天皇制や国家神道，およびそれらを他の国々に広めようとする試みを論じるが，その不合理性を指摘する時，彼女の論法の根底にある西洋の作り上げたオリエントというカテゴリーとダウイニズムの人種への適用の不合理さを認識していない．つまり，経済的・軍事的弱者に対する支配と搾取のメカニズムを，オリエントという枠組みを崩せないために，西洋にも働いていることを理解できないでいるのである．

戦後，日本が高度成長を遂げた時，西洋の驚きは，やはりこのオリエントの枠組みから生じたものと言えよう．この点で，Benedict が *The Chrysanthemum and the Sword* の 最後でいみじくも予想したように，日本が資本や人材を経済に集中できたことがその最大の原因であり，オリエントの一つの民族が科学技術を産業にうまく活用できたのは，何も神秘的なことではない．科学技術は，西洋中心主義が生み出したカテゴリーを修正するものであって，決して補強するものではないのだ．一方，それに対して，オリエントの枠組みをはめられた日本が，文化面でそれを克服することはほとんど望めなかった．この点を，日本の飛躍的な発展の原因を探る時，Vogel が *Japan as No. I* で捕えているかというと疑問である．彼もやはり，"one of them" として日本を捕え，日本の経済的繁栄の原因を日本の特殊性に帰そうとしている．従って，日本が日本であるかぎり，繁栄を続けるわけであるから，やがて日本は世界一になるという論理であるが，しかし，日本がうまく技術を産業に活用したのは，まさに科学技術のもつ普遍的特質のためであるから，他の国は，「日本」にならずして模倣することが出来るのである．ちょうど，西洋の科学技術を日本が「西洋」にならずして模倣したように．従って，"Without importing geisha houses, Americans have ample social mechanisms that should be used to create and maintain trust between key groups so that, when necessary, important matters can be negotiated under optimal conditions." という彼の提案は，[14] もとより不要なのだ．

科学技術が最も早く発展したヨーロッパの宗教や思想も同じく普遍的であるという考え方は，今日ポストコロニアルの視点からの研究によって批判されているところであるが，しかし依然として強く支持されている．それは，Karel van Wolferen の一見極めて鋭い分析にも影を落としている．日本を個人の存在しない "the system" が支配する集団として機能的に捕えようとする彼の *The Enigma of Japanese Power* で，例えば，"Concepts of independent, universal truths or immutable religious beliefs, transcending the worldly reality of social dictates and the decrees of power-holders, have of course found their way into Japan, but they have never taken root in any surviving world-view." と言う時，[15] 科学技術と違って「独立した普遍的真理

や不易の教条の概念」が日本に根付かなかったとしたら，まさにその事が西洋の真理や教条というものが普遍でも不易でもない証左ではないだろうか．

これまで見てきたような日本研究の成果を踏まえて，日本を描こうとしたのは，Michael Crichtonである．*Rising Sun* は，舞台をロサンゼルスにとり，アメリカを脅かすまでに躍進した日本企業を扱って，アメリカと日本を対立的な図式で描いている．この小説は，二人のアメリカ人の警官が，日本企業の超高層ビルで起こった殺人事件を解決する話であるが，犯罪の謎を解くのと同時進行に，日本の躍進の謎が解明されていくという二重構造になっている．そして，二人のアメリカ人は，日本の事情に詳しいConner（オリエンタリスト）が，Smith（西洋人の読者）に日本人および日本文化についての謎を解明していくという関係に設定されている．例えば，Smithが，彼と応対した日本人が相手によって態度を豹変させたことに対して怒りを発すると，Connerは次のように説明する．

> "And he would be quite surprised to learn that you're angry with him. You consider him immoral. He considers you naive. Because for a Japanese, consistent behavior is not possible. A Japanese becomes a different person around people of different rank. He becomes a different person when he moves through different rooms of his own house."[16]

Crichton自身，小説の末尾に参考文献を挙げていて，彼はそれを十分に消化して「日本」なるものを作品化している．従って，そこに再現されているものは，まさに，VogelやWolferenの「日本」なのである．そして，そこには，Connerが "It's just that Americans believe there is some core of individuality that doesn't change from one moment to the next. And the Japanese believe context rules everything." と説明するように，[17] 日本人は類型として現われ，主体，あるいはパーソナリティをもった個人としては描かれないのである．

それに対して，Kazuo Ishiguroの日本を扱った *A Pale View of Hills* と *An Artist of the Floating World* は，日本文学の英訳を除いては，主体をも

つ個人として日本人の登場人物を描いている数少ない小説であるものの，それら登場人物は，ジャポニストの作り出した「古い日本」の住人である．戦前と戦後の日本を対比的に捕えているようであるが，*An Artist of the Floating World* に登場する一人の女性が "'Suichi [her husband] believes it's better he [his son] likes cowboys than that he idolize people like Miyamoto Musashi. Suichi thinks the American heroes are the better models for children now.'" という言葉に窺えるように，[18] Ishiguro が戦前の日本と対置している戦後の日本は本当はアメリカ，つまり，戦後の日本という仮面を被った「西洋」なのではないだろうか．Ishiguro は，明治時代から使われてきた「古い日本」と「新しい日本」の構図を彼の作品で繰り返しているに過ぎないのである．

以上のように，本論において取り上げた著作に関して，細部にわたる検討をしたわけではない．それぞれの作者が，鋭い分析を試みていることは，認めなければいけない．しかし，本論で引用した事柄が彼らの著作に存在するまさにその事実によって，それらの根底では，西洋が日本を取り上げる際，「我々」である西洋に対して日本を "one of them" と捕えるオリエントの枠組みの中で，歴史的・自然的要因や，国際環境の中で日本が選択した行為が解釈され，その過程を通して「日本」が作り出されていくことが分かる．だから，西洋においては，日本は宗教的・哲学的に理念や普遍性の欠如した国であり，政治的・社会的には個人主義・自由主義と対立する国である．それは他のアジアの国々とも異なるということになる．ただこれは，あくまでも西洋の視点から見た「日本」の姿であり，絶対的な真理であるという保証はない．単なる西洋の幻想かもしれないのである．

注

1. Lafcadio Hearn, *Glimpses of Unfamiliar Japan, vol. 1* (Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1922), pp. 247–8.

2. 例えば，グレゴリー・クラークは，『ユニークな日本人』（講談社，1979）において，「ユニーク」を極めてアイロニカルな意味で使っている．

3. Edward W. Said, *Orientalism* (New York: Vintage Books, 1979), p. 5.

4. John M. MacKenzie, *Orientalism* (Manchester and New York: Manchester University Press, 1995) を参照.

5. Basil Hall Chamberlain, *Things Japanese* (1939 [6th edition], rpt. Tokyo: Meicho Fukyu Kai, 1985), pp. 7–8.

6. *Things Japanese*, p. 4.

7. J.R. ブラック,『ヤング・ジャパン 1』, ねずまさし・小池晴子訳 (平凡社, 1970), 4 頁, 8 頁.

8. *Things Japanese*, p. 296.

9. *Glimpses of Unfamiliar Japan, vol.* 2, p. 371.

10. *Glimpses of Unfamiliar Japan, vol.* 2, p. 378.

11. Ruth Benedict, *The Chrysanthemum and the Sword* (Rutland and Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1954), p. 2.

12. Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830–1914* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1988) を参照.

13. *The Chrysanthemum and the Sword*, p. 96.

14. Ezra F. Vogel, *Japan as Number One* (Rutland and Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1980), p. 238.

15. Karel van Wolferen, *The Enigma of Japanese Power* (New York: Vintage Books, 1990), p. 9.

16. Michael Crichton, *Rising Sun* (Arrow, 1992), p. 67.

17. *Rising Sun*, p. 68.

18. Kazuo Ishiguro, *An Artist of the Floating World* (London and Boston: Faber and Faber, 1986), p. 36.